

< 柏里本通商店街：大阪市（西淀川区） >

自然との調和を求めた時代回帰型プロジェクト！

～懐かしくこころ安らぐ商店街！～

取組みの効果

- ◆ 来街者とのコミュニケーション機会の増大
- ◆ 駅からの人の流れに変化（通行量の増加）
- ◆ 地域団体（近隣学校、PTA、等）との連携による商店街イベントの増加

取組みの内容

- ◆ コミュニティ施設設置事業
- ◆ ※1 安癒和（やすいな）地蔵の設置
- ◆ アーケード改修事業
- ◆ 地域団体への商店街活用を推進

※1 安癒和地蔵の名の由来：商店街は、安全・安心で、休憩所で気持ちを癒してもらい、和やかに過ごしてもらいたいと言う願いと商店街での買い物は、「安いな」と言う意味の語呂を掛け合わせて命名。

取組みの背景

柏里本通商店街は、JR 神戸線塚本駅から西方50mに位置している。

塚本駅の乗降客数は、1日17,000人で、全盛期に比べると1/3に減少している。また、平成9年にはJR東西線御幣島駅みてしまの開業に伴い、JR塚本駅利用者が激減し、通行量も平成9年の10,846人から平成22年は9,476人と12.6%の減少と

〈商店街データ〉

- 所在地 大阪市西淀川区柏里3-3-24
- 立地 JR 神戸線塚本駅から西方約50m
- 店舗数 31店
- 問合せ 柏里本通商店街振興組合（サンリバー柏里）
理事長 八木利彦
Tel 06-6475-1482

なり来街者数も同様に平均12.6%の減となっている。

また、商店街のある西淀川区全体の世帯数、人口ともに平成16年度と比べると平成20年度ではいずれも増加傾向にあるが、高齢化が進み60歳以上の人口全体の比率が上がってきている。

商店街には医療関係が進出し、医療機関が休診となる土、日には通行量が、9,476人（平日）から7,880人（休日）に減少していることから、JR塚本駅周辺の通行者を商店街に誘導するとともに、高齢者の方に、休日に商店街へ足を運んでもらうことが必要であった。



取組みのきっかけ

これまで本商店街では、各店が、お客様からの電話等による注文を受けた場合、商店街内の他の店舗での買い物についても注文を伺うなど以前から商店街内各個店のつながりが強く、また、訪問時には御用聞き役を果たすなど近隣の顧客と密接なつながりを持つことで売り上げ減少に歯止めをかける努力を行ってきた。

また、桜の飾り(3月)、鯉のぼり(5月)、七夕飾り(7月)等季節毎月違った装飾を施し、商店街に変化と賑やかさを持たせ、来るたびに違う楽しみが味わえる、魅力ある商店街となるよう努めてきた。

しかし、地域の高齢化が進む中、ヘルパー派遣事業が急速な広がりを見せ、スーパーでの代理購買が増加する等、高齢者がじかに商店街で買い物をする機会が失われ、来街者は減少傾向にあった。

そんな中、高齢者の方も本来は、自分の目で品物を見て買い物を楽しみたいのではないかと考え、高齢者が商店街へ買い物に行く時の懸念材料は何かを考えたとのこと。

また、約20年前に設置したアーケードは、雨漏り、排水溝のつまりなど、老朽化による影響が出てきており、さらに電灯も多数切れ始め、維持管理費用の増大も大きな課題となっていた。

さらには、組合員がいつでも集まって話ができる集会所が必要であった。それまでは、どんな些細な用件でも店舗を借りて組合集会を行っていたため、使用料がかかったり、急きょ集まる時の場所の確保が大変

だったとのこと。夏祭りに台風が近づいた際には、前日に延期かどうかを決めるため急きょ集まることとなったが、店舗が確保できなかったため、商店街の通路の真ん中で集まって議論したという。このような体験から、商店街組合員の間で集会所の必要性は共通の認識となっていたそうである。

塚本駅周辺の通行者の流れを商店街に呼び込むため、これらの課題を解決し、組合員が気軽に集まって話し合うとともに、来街者が安心して買い物を楽しめる商店街づくりが必要であった。

活性化の要因

- ◆ 休憩スペースやトイレを設置し、商店街で買い物する際の懸念材料を解消
- ◆ 商店街シンボル「安癒和地蔵」の設置
- ◆ アーケード改修により、商店街が明るくなり、JR塚本駅からの通行ルートとして利用される機会が増加
- ◆ アーケードにLED照明を使用し話題性をアップ。さらに照明の色に意味を持たせることにより、来街者の興味を増幅
- ◆ 商店街を地域団体の活動の場として提供



事業の仕組み

国の補助事業を活用し、組合員の共通認識であった集会所を設置。「せっかく作るなら」との思いで、多目的コミュニティスペースとして地域の人にも使ってもらえる仕組みにした。

また、商店街に来てもらう際の心配事をなくすため、買い物の際不安になるトイレや、疲れた時に休める休憩所を設置。

施設設置用地は、近隣スーパーライフの荷物置き場であったところを無償で貸与してもらった。以前は商店街に面したところは壁面で選挙ポスターが多数貼られその手前には、3列に並ぶほどの駐輪があり、見苦しく、通行の妨げにもなっていた。

コミュニティ施設設置にあたり、ライフに協力を求めたところ、ライフ塚本店は「ライフの支店展開・初号店」で柏里本通商店街に愛着を持っていただいていたこと、荷物置き場がライフの自己所有地であったこと、また、企業として地域貢献を検討していたこともあり協力を得ることができた。



コミュニティ施設のコンセプトは、高齢者等が買い物で疲れて、気分が悪くなり少し休みたいと思ったときに、心が安らぐような懐かしい風景に出会ったような気持ちになれ

ることをイメージして安癒和地蔵を安置し、草花や縁側でやすらぎ空間を演出している。



アーケード改修には多額の費用を要することもあり、アーケード設置時から次期改修資金として積立てた資金と国の補助事業を活用。

商店街内にアーケード改修委員会を設置し、「ただのアーケードではおもしろくない」とのことで、テーマ「自然と調和」を設定。アーケード照明にLED電灯を使い、色合いを持たせることにつながった。

なお、当初は子ども達に星を見せてあげたいとの思いからプラネタリウムも考えてみたそうだが、構築物に映像を映すことは消防法上困難であり、組合員からは店舗が下にあるのに上に注目されるのはいかがなものかとの意見もあり、断念したそう。

また、本来は、東京から西でアーケード照明をすべてLED化したところがあったので、そうしたかったそうだが、LEDの光量やLED電球の重量からアーケードへの荷重を考えると全面LED化は断念せざるを得なかったという。しかし、補助電灯として26箇所にスポット間接照明として活用し、様々な色を天井に映し出せるようにした。

さらに、単なる装飾やイルミネーションには補助金が出ないということもあり、色で情報発信することを発案。「赤は晴れ」「白はくもり」など、翌日の天気予報を照明で表現することによって、来街者にユニークな情報発信を行っている。また、大売り出しや夏祭りなど、特別な日にしか見れないレインボーバージョンもあるそう。



他にも、近隣の淀商業高等学校福祉ボランティア科の生徒が実施するチャリティバザーや、塚本駅から盆踊り会場までの盆踊りパレードコースなど、地域の活動の場に積極的に商店街を提供している。

取組み上の工夫や苦労

国の補助金を活用するにはニーズ、新規性、創意工夫が求められる。今回の補助金の申請時は防犯カメラも併せて補助金の対象として組み入れたかったが、防犯カメラが誰からのニーズなのか、他の商店街でも設置されており新規性に乏しく、創意工夫の余地もなくやむなく補助金申請から除外した。

アーケードの照明も天気予報という情報発信性を組み入れる工夫など国の補助金申請は難しく工夫が求められる。

アーケードのカラーの意味は、アーケード設置当初解説するようなものを敢えて置か

ず、お客様から「なぜ日によって色が違うのか」と聞かれることも多かったそう。実はこれが狙いで、アーケードの色の意味を聞いてもらい、お客様や子どもたちとのコミュニケーションのきっかけにしていたとのことであった。

めざす商店街像（今後の展望）

安癒和地蔵の安置を機にお地蔵さん巡りを計画中、ポイントカードも利用しながら毎日 1 回安癒和地蔵に来ていただくとポイント付与するなどとにかく商店街に足を運んでもらうことを実施していく。

また、地域との連携として、駐輪や自転車の走行マナーなど自転車問題について行政や電鉄（JR）、商店街が一体となった取組みを通じ地域の安全にも取組みたい。

商店街のイベントも地域貢献の一環としてクリーンアップ事業を計画中、これはゴミを拾いながら地域を回ってみませんかという企画で、参加者には商店街ポイント付与の特典を考えているそうである。

このような地域連携や商店街イベントを通じて、商店街に来ると昔懐かしいコミュニティや特典があり、こころも癒せる商店街としたい。

こぼれ話(失敗談)

F A Xが出始めた頃、F A X会員を募集し、会員にF A Xで情報を提供し、注文をとるというシステムに約 30 名の会員登録があった。

しかし、各個店のお得情報を商店街で集

約して情報を提供すればよかったのだが、各個店別にFAXによる情報提供を行ったことにより、受け取る側にとって無駄となる情報が多くなってしまった。また、受信者の機器の故障か送信側の機器の故障かわからないが、同じ情報が繰り返し出力されたことがあった。

FAX会員事業は、商店街側で企画し、お客様のニーズを聞くことなく実施したため、お客さまの側に立った発想が欠けていたように思われる。

この事業を経験したことで、お客さまのニーズを聞くことが重要だと言うことに気づき今の地域コミュニティ施設の運営に役立っている。

以前、トイレに関してだが、お客様から「トイレに荷物をかける場所がない。買い物に来て荷物を持ったままトイレはできない。また、床には置きたくない。ちょっと荷物を掛けるフックをつけてあるだけで助かる」という要望があり、即実行するとあくる日には御礼の声があった。

お客様の声を実行すると口コミで、実施したことが広がり、商店街の評判につながっていくと感じた。

取材を通して

柏里本通商店街は、周辺の顧客を本当に大事にされていると感じた。

今回取材を受けていただいた、八木理事長と藤井理事は、商店街組合員のリードオフマンとして商店街活性化に向けた役割を果たしていると感じた。

理事は、「コミュニティ施設（休憩所）は、

救急箱と同じで、必要とする人が、必要な場所として利用していただければいい」と言う。

昔懐かしい雰囲気を出すために花を飾ったり、使わなくなった石臼を取水鉢の代用として、蓮を植えたり、メダカを飼っている。花等の育成や管理は、毎日の手入れが必要で世話のかかるものだと思う。

実際、事業を実施する際の質問会では、「誰が花に水をあげるのか？」等の質問も出たそうだが、理事が引き受けるということで事業実施の了解を得たとのことであった。

理事は、花を管理していると、お客様からアドバイスもらうこともあり、お客様とのコミュニケーションにもなると前向きで、また、メダカを産卵させて増やし、地域の子どもたちにも分けているとのことであった。

取材日も休憩所では、小学生と思われる子どもが数人涼んでいた。

柏里本通商店街の様々な取組みは、高齢者には時代回帰で懐かしく、子どもたちは都会の真ん中で憩いを感じられる新鮮な場所になっているのではないかと思う。

だから、高齢者のみならず子どもたちまでもが商店街に行ってみようと思える場所になりつつあるのではないかと思う。

また、地域との連携も大切にしており、地域からも大切にされている商店街だと感じた。